

# ぐるぐる回る大いなる意識、日の出から日の入りまで

## グルマーイの誕生日のお祝いの報告

2018年6月24日

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラム

### 第3部

2018年のグルマーイの誕生日のお祝いに参加した人たちより

## プラサードを受け入れ、運命を作り直す

グルマーイがアンナプールナー・ダイニングホールに入って来た時、アートマ・ニディ中にブーパーリー・ラーガの「オーム・ナモー・バガヴァター・ムクターナンダーヤ」のチャンティングが鳴り響いていました。参加者たちは、誕生日のケーキカットの式にグルマーイを迎えるために、そこに集まっていた。

1956年にインドに最初のシッダ・ヨーガ・アーシュラムであるグルデーヴ・シッダ・ピートウが設立されて以来、アーシュラムで食べ物が用意され提供される場所はアンナプールナーと呼ばれてきました。グルマーイのグルであるバーバ・ムクターナンダが、アンナプールナー・デーヴィー —— 食べ物を司る神、滋養の女神 —— をたたえて命名したのです。長年にわたり繰り返し、グルマーイとバーバは、「食べ物は神である」という教えを授けてきました。そして私たちの多くが、グルマーイが2016年の誕生日に行った同じ題名の「食べ物は神です」の講話から多大な靈感を得ました。シッダ・ヨーガの道では、私たちは、「アンナプールナー・ストラム」という美しい賛歌を歌って、アンナプールナー・デーヴィーをたたえます。

グルマーイが椅子に座ると、司会で SYDA ファウンデーションの理事の一人であるエリザベス・グレイグがグルマーイを歓迎し、皆でグルマーイに幸せな誕生日を願いましょと呼び掛けました。私たちは皆、その瞬間 —— 私たちの愛を集めてグルマーイにささげ、彼女にこれまでで最高の誕生日を願う時 —— を待っていました！

その後、誕生日のお祝いの音楽の指揮者であるクリシュナ・ハダッドが、ミュージックアンサンブル、そして私たち皆を、「シュリー・グル・パードゥカー・パンチャカム(シュリー・グルのサンダルについての五連詩)」の朗唱に導きました。シッダ・ヨーガの道では、この詩節は毎朝のシュリー・グル・ギターの一部として、シュリー・グルの足に敬意を表すために朗唱されます。教典は、シュリー・グルのハスの足は知識とシャクティの具現であると称揚します。シュリー・グルのパードゥカーの力は、グループルニマーの時期に私たちがしばしば話したり読んだりする、「ニザームッディーンとアミール・クスローの物語」に例証されています。

グルマーイをこうしてたたえた後には、私たちの心は明らかに敬愛の念でいっぱいになりました。クリシュナの指揮で、私たちは「ナーチャー・レー・メーロー・マナ」というバジャンを歌い始めました。グルマーイは、詩聖カビールが書いた詩に自ら曲を付けたこのバジャンを、1997 年から 1998 年にかけてカリフォルニア州のサンタクララで行われたシッダ・ヨーガの冬のリトリートのために作りました。それからずっと、毎回のグルマーイの誕生日のお祝いに世界中で歌われてきたのです。

このバジャンの第 1 節で、私たちは歌います。

この神聖な愛の高まりの中で、

惑星も星々も陶醉して踊る。

魂の新たな誕生それぞれが、大いなる喜びである。

丘も海も大地も踊る。

あらゆる人が笑いと涙でこの至福を祝う。

すべての人間が、この至福を笑いと涙で祝う。

グルマーイのために「ナーチャー・レー・メーロー・マナ」を歌う体験をしたある訪問セラヴィアは話しました。

私たちが歌っている時、座ってグルマーイを見詰めていた生後 6 カ月の赤ちゃんはすべての瞬間を楽しんでいるようでした。手や腕を振り動かし、体を揺らして、笑顔は輝いていました。グルマーイは彼に向かって大きく目を見開いて、彼を愉快に笑わせていました。彼が自分の胸の所に手を持っていった時、グルマーイも手を自分の胸に当てて応えました。そのやり取りは見ていて美しく、私の心を深く感動させました。

「神聖な愛の高まり」は、ホールの中に明らかでした。エリザベスが心を込めてグルマーイに誕生日ケーキを切るように誘った時、私たちは皆それを感じていたのです。

グルマーイは頭を巡らして美しいケーキを見ました。そしてグルマーイは、「話したい物語があります」と言いました。そして以下のような話をしました。

昔ある所に一人のラビ(ユダヤ教指導者)がいました。そう、キャッツキルでラビの話をするのはぴったりです。このラビは 80 歳でした。ある日、誰かが彼に質問をしました。

「ラビ、あなたにはかつて何千人も弟子がいたのに、今は3人しかいません。何が起きたのですか」

ラビは言いました。「私は昔若かった。それだけの弟子たちすべての面倒を見ることができた。今私は 80 歳だ。3 人の弟子しか面倒を見ることができない」

グルマーイは、なぜこの話をしたかを説明しました。「長年の間、私は誕生日ケーキがいつも違う大きさだと気づいてきました。実際、1990 年代前半のある年、豪華な誕生日ケーキは途方もない大きさで、ドアを通り抜けることができなかつたと聞きました。ケーキを通すために、ちょうつがいからドアを外さなければならなかつたのです！」

そのイメージが誘発した笑いの波が、アンナプールナー・ダイニングホールに起こりました。私たちの想像力は勝手に広がりました。そのケーキはなんて巨大だったに違いない！ どのくらいの寸法だったのでしょうか？ 私たちがまだくすくす笑っている時、グルマーイはラビの物語と今年の誕生日ケーキの大きさについてが、どうつながるかを示しました。彼女は言いました。「昔私は若かった。誕生日ケーキはどれもみんな巨大だったので、メンテナンス部門に行って人々を呼んできて、ドアを外してもらわなければなりませんでした。そして今年のケーキを見た時、私は思いました。『ちょうどラビみたいに、私は年を取ったに違いない。グルマーイにはこのくらいの大きさのケーキが今はちょうどいいと思われたに違いない』」

その瞬間、笑いの爆発が起こりました。グルマーイの笑い声とすべての信奉者たちの笑いは、アンナプールナー・ダイニングホールに雷鳴のようにとどろきました。その爆笑の渦の中で、グルマーイは言いました。「今日、私たちは笑いを贈っています！ これが 2018 年の誕生日のお祝いのテーマです。笑いを贈ること！」

それからグルマーイは椅子から立ち上がって、ケーキの方に歩み寄りました。彼女は、プレーマという名の 10 歳のシッダ・ヨーギが華やかなお祝いの装いをして近くに立っているのを見ました。グルマーイはプレーマに、ケーキを切るのを手伝ってくれるか尋ねました。プレーマは大きな笑顔でうなずきました。二人は一緒にケーキの段の一つにきれいに並べられた 11 本の

細長い金色のろうそくを吹き消し、そして私たちは皆で声を合わせて、「サッドグルナートゥ・マハーラージ・キー・ジェイ！」と叫びました。

グルマーイはプレーマの手を自分の手で包み、彼女がケーキの最初の一切れを切れるようにしました。グルマーイはケーキの小さな一切れをフォークに取り、プレーマの前に掲げました。プレーマはこのプラサードを受け取った喜びに目を大きく見開きました。グルマーイがプレーマにケーキがおいしいかと聞くと、プレーマは目をさらに大きくして夢中でうなずいて言いました。「うーん、とってもおいしい！」

この瞬間の背後には、プレーマにとってとても重要な物語があります。6年前の2012年、プレーマが4歳だった時、彼女はシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムでのグルマーイの誕生日のお祝いに参加しました。グルマーイが誕生日ケーキを切るという時、たくさん子どもたちがグルマーイの周りに集まりました。ろうそくを吹き消した後、グルマーイはケーキの最初の一口を子どもたちにあげ始めました。ある時点で、グルマーイが小さな一切れのケーキをある男の子の前に掲げたところ、その子は首を横に振って、いらないと意思表示しました。彼はケーキの味見をしたくなかったのです。するとグルマーイは次の子に向けてケーキをあげようとしていました。それがプレーマだったのです。プレーマはその少年のまねをして首を横に振りました。彼女はグルマーイがあげようとしていたケーキを受け取りませんでした。そうしている間に、他の子どもたちは興奮してグルマーイからケーキをもらい、皆、その味を楽しみました。

この2012年のやり取りは、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトの「[Birthday Bliss Pilgrimage](#) (誕生日の至福の巡礼)」のビデオに記録されています。プレーマと彼女の家族や友人たちは、何年もの間そのビデオを何度も見てきました。見るたびにいつも、誰かがプレーマがグルマーイからケーキを受け取らなかったことについて何か言いました。プレーマはたびたびその時のことについて、その日グルから甘いプラサードを受け取らなかったことについて、考えてきました。プレーマの両親は、プレーマの自然な気持ちはグルマーイがあげようとしていたケー

キを受け取ることだったろうと思いました。でも、自分の心に従う代わりに、彼女は前にいた男の子を見て、これが「適切な行動」に違いないと思ってまねをしたのでした。

今年、2018年、プレーマは誕生日ケーキを切るグルマーイの手伝いをしただけでなく、グルマーイが一切れをプレーマにあげようとした時、彼女は心を開いて、それを味わうというグルマーイの招待を受け入れました。彼女は自分の心に耳を傾け、ためらわずそのプラサードを受け入れました。「誕生日の至福の巡礼」のビデオを見て、その瞬間を目にした——あるいはこの報告を読んだ——人は誰でも、プレーマが自分の物語を変えたことが分かるでしょう。彼女は自分の運命を作り直したのです。

ケーキカットの式の後、グルマーイは皆を見回して、大きな笑顔ときらきらした目で言いました。「みんな、本当にありがとう。では、誕生日のお祝いのサツツァングを始めるためにシュリー・ニーラーヤに行きなさい。私はアンナープールナー・キッチンに行って、料理人たちが私たちの昼食を用意しているか確かめてきます。後で会いましょう」

昼食が用意されているかを確認に行くのとグルマーイが言うのを聞いて、私たちのおかしさはピークに達しました！ 私たちはグルマーイのからかいとユーモア、そしていたずら心を大切に受け止めるようになってきました。このお祝いをもっとあること、またすぐにグルマーイに会えることを知って、私たちの心は喜びで躍りました。私たちは歩くまでもなく、ほとんど漂うように、グルマーイを再び迎える準備をするためにシュリー・ニーラーヤに行きました。



© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。

続く…